

博士課程教育リーディングプログラム 事後評価結果

機 関 名	京都大学	整理番号	D01
プログラム名称	グローバル生存学大学院連携プログラム		
プログラム責任者	北野 正雄	プログラムコーディネーター	寶 馨

博士課程教育リーディングプログラム委員会における評価

[総括評価]

概ね計画に沿った取組が行われ、一部で十分な成果がまだ得られていない点もあるが、本事業の目的をある程度は達成できたと評価できる。

[コメント]

リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築については、9研究科及び3研究所の協働によるグローバル生存学（GSS）の提唱と、それに基づく学生教育システムとして10項目のルーブリックを設定し、e-ポートフォリオを活用した学位プログラムを構築するとともに、中間評価結果における指摘を受けて、持続可能開発目標（SDGs）等を組み込むなど、時宜を得た教育内容の改善を図ったことは評価できる。その一方で、一部の熱心な教員等を除き、本プログラムと専門領域との共有化ができていないとの学生からの指摘もあるなど、十分な成果がまだ得られていない点もあることから、今後一層の努力が求められる。

修了者の成長とキャリアパスの構築については、所属研究室での研究だけでは得られなかった視座を持つことができ、10項目からなるルーブリックに基づく教育により俯瞰力が養成されたことがうかがわれる点や、多様な専門分野を持つ教員、学生との交流による人的ネットワークの構築もなされた点は評価できる。その一方で、修了後のキャリアパスとしてアカデミア志向が強く、産業界・国際機関等へ進出した者が少なく、出口（就職）戦略が不十分と判断される点があり、今後一層の努力が求められる。

事業の定着・発展については、大学院改革の理念の共有等に努めるとともに、「大学院横断教育プログラム推進センター」の設立に向けた検討を始めており、京都大学の別の博士課程教育リーディングプログラムである「京都大学大学院思修館」（総合生存学館）との連携が検討されていることなどは評価できる。その一方で、支援期間終了後の学生に対する経済的支援体制については懸念がある。また、本プログラムの継続については、平成28年度より学内協力教員制度が設けられているが、特に若手教員への業務負担の増加となることや教育の質保証の点でも懸念が残ることから、今後一層の努力が求められる。